

## 六月二十四日(土) シンポジウム 要旨

シンポジウム「神仏の儀礼と宗教空間を担うもの——唱導・仏像・仮面」

司会 阿部泰郎氏(名古屋大学)

寺社とその周縁で営まれる仏神事・祭礼等の各種儀礼は、豊かな宗教空間を創りあげていた。それは、継承され、あるいは断絶し、再興されるなかでも、様々に変容しつつ、社会を動かす力としてあった。その始源が、縁起としてしづけられるならば、説話には、それらの運動が社会の心意にもたらした影響が、伝承として記憶されていると言つてよい。その主役をつとめ、登場するのは、多く儀礼に携わり、宗教空間の生成を担う人々であった。

たとえば、東北院の不断念仏に集い、鶴岡八幡宮の放生会に参勤する諸職の人々が歌を詠むという、職人歌合の仮構の設定も、また稲荷祭の行列見物の棧敷に一族として連なった『新猿楽記』の職能者の面々も、あるいは『古今著聞集』に部類された諸道とそのカテゴリーを担う人々の逸話も、多くはそうした舞台で演ぜられたしわざであった。儀礼のためのテクストは、彼らの配役や台本詞章とのみ見なされるが、そこに説話を代入したとき、その儀礼に生命を吹き込み、この場に名誉を施す彼らの“芸能”が立ちあらわれる。

儀礼を担い、宗教空間を生気付ける焦点となる対象は、限りなく見いだせるだろうが、このシンポジウムでは、中世のあらたな中心となった東国と鎌倉をめぐって形成・伝承された儀礼と宗教空間を探究する。幕府の草創期に、鎌倉とその周辺では、將軍(鎌倉殿)をはじめ後家人たちを檀那として多くの寺院や仏教が造立されたが、その供養を司る唱導として安居院澄憲が導師をつとめ、また造像に携わって仏師運慶が活躍する。かれらの関わった造寺造仏の営みと言説に表象される世界、それによって記憶された仏像の靈験伝承などから、中世東国の宗教空間を読み解くことを試みる(牧野・瀬谷報告)。

更に、東国の神仏の宗教センターとなった鶴岡八幡宮を中心に、その周縁で、祭祀と芸能に携わる職能者たちの役割を伝える近代まで存続した山内の祭礼に登場した面掛行列に注目する。宮寺や禅宗寺院と都市鎌倉が構成する宗教空間を可視化する儀礼システムとして営まれた祝祭である行道会を歴史的・民俗的に検討する。そこに想定されるのは、將軍の王権都市である鎌倉の境界を画し、聖俗や淨穢を分ち交錯する媒ちとしての身分的周縁者が与えられ、果たした役割であろう。仮面をつけた彼らのはたらきは、唱導者や巧匠の営為といかに呼応し、響き合うのだろうか(古川報告)。

あえて、こうした問いを投げかけて、文学研究と美術史研究そして歴史民俗研究それぞれの領域を超えた接点を探ってみたい。

### 報告「唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み」

牧野淳司氏(明治大学)

説経師の活躍した場として周忌などの追善、法華八講などの講説などのほか、建立された堂舎の堂供養や造立された仏像の仏供養がある。堂舎塔廟により三宝はその土地に住することができる。仏に似せた形像により人々は仏法を持つことができる。伽藍とそこに安置する仏像は仏法流布の基であり、説経師の働きかけは当然であった。では、その関与のあり方は具体的にどのようなものであったか。造寺造仏を担った巧匠や仏師と説経師との連携(間に施主が入る)の実際を知らせてくれる史料は必ずしも多いとは言えないかもしれない。だが、堂供養や仏供養という儀礼の場で、説経師が繰り広げた言説は唱導資料としてのこされている。本発表では、唱導資料から、説経師が堂舎建立や造仏の営みにどのような役割を果たしたのか、考えてみたい。

手掛かりとして、国立歴史民俗博物館所蔵『転法輪鈔』に注目したい。これには堂供養表白が多数収録されているが、將軍(鎌倉殿)とその周辺人物を施主とするものがいくつ含まれる。東国

における宗教空間の創出に澄憲ら唱導がどのような役割を果たしたのか、という問題から始め、関連する唱導資料を参照しつつ、上記課題に迫りたい。たとえば歴博本には于填王の名がしばしば登場するが、これについては『安極玉泉集』に含まれる于填王の釈迦像造立の物語を参照できる。これは、施主と仏師との協力により整えられた舞台で、仏による説経が行われて完成する仏像建立儀礼の理想的光景を語っていると読むこともできる。

### 報告「『靈驗仏師』 運慶の誕生——称名寺聖教をてがかりにして」

瀬谷貴之氏（神奈川県立金沢文庫）

仏師運慶（貞応二年（一一二二）は、最も著名な仏師、そして日本美術史上における重要作家の一人といえよう。その作風は鎌倉時代という新時代に相応しい、力強く写実的なもので、卓越した技量をみることができ。本発表では、運慶の後々まで語られる名声が、その在世中から「靈驗」をキーワードとして形成されていったことを、称名寺聖教などの関連資料を通して明らかにしていきたい。

運慶は生涯において数多くの重要な造仏を行ったと考えられるが、実はその名声を高めた画期は、造仏ではなく仏像の修理であった。国宝・称名寺聖教には、建久八年（一一九七）五月から翌年の冬に行われた、東寺講堂諸尊像の修理関係の記録が数点含まれる。特に『東寺講堂御仏所被籠御舍利員数』の記録は詳細で、それによれば諸尊像の修理は、父康慶から工房を受け継いだ運慶が初めて主催して行った仕事であった。そして修理を始めると、諸尊の像内から次々と空海在世中に籠められたと考えられる仏舍利が発見された。仏舍利は一函に納められ、京中の人々が群れを成して参詣したという。この仏舍利発見の奇瑞は、運慶の名声を高めたと考えられ、その後、運慶の造る仏像には「靈驗」性が付与されて行くことになる。一方、近時詳しくその内容が紹介された、旧田中本『転法輪抄』（現国立歴史民俗博物館）所収の願成就院や永福寺薬師堂関係の供養表白（同文の一部を称名寺本『言泉集』にも収録）では、担当仏師運慶を伺わせる記述は無い。これは『吾妻鏡』の関連記述にも同様の傾向がみえるものである。すなわち運慶は建久八年の東寺講堂諸尊像の修理以降に、「靈驗」性が付与され、名声を高めていったからに他ならない。またその「靈驗」性の付与には、鎌倉幕府の意向が強く働いていた。本発表ではこの他に、今まであまり積極的に評価されてこなかった瀬戸神社所蔵舞楽面のうち、抜頭面の銘文などについても再評価しながら、「靈驗仏師」運慶の誕生の軌跡を追ってみようと思う。

### 報告「鎌倉の寺社と芸能、儀礼」

古川元也氏（日本女子大学）

本報告では、中世に政権所在地であった鎌倉と、そのゆかりの地域に伝わる芸能と儀礼を検討します。鎌倉には毎年、月中旬に行われる山ノ内地区の神輿巡幸や、9月18日に行われる御霊神社の面掛行列など、宗教儀礼を中心に据えた祭礼が多く伝われます。これらの祭礼は芸能的な側面を伴っており、祭りの起源や中央から鎌倉に伝播した関係を考えて、時間的・地域的な広がりを持つテーマであることがわかります。芸能や儀礼は、当時のままの姿で伝えられることはまれであり、何らかの変化を伴って今日に伝わります。信仰の継承や宗教テキスト伝来の視点で残されたモノを見ることの重要性を提案します。

同時に、鎌倉ゆかりの金沢、六浦の信仰も考察の対象とします。いずれの場所にも具体的な信仰遺物（モノ）が継承されており、宗教テキスト（史料）が残されている事実が重要で、このような展示が行えるのも両者が社寺や地域に守られ、継承されてきたからにはなりません。継承されてきた作品は美術作品とも、民俗資料とも区別しがたい、しかし信仰の継承の証となる資

料です。儀礼で用いられる道具は、破損し修理され新造されて今に至ります。信仰や儀礼のあり方を文字資料として明らかにできる宗教テキストも難解です。信仰の継承はモノと文字資料が相まって可能となります。紹介する一連の作品を通じて、信仰と儀礼にかかわるこれら作品の可能性を考えていきたいと思います。

## 六月二十五日(日) 研究発表 要旨

### 『平家物語』白拍子起源譚と藤原宗輔女若御前の関連について

根本千聡氏(法政大学大学院人文科学研究科・博士後期課程)

平安時代末期の公卿藤原宗輔と、その女若御前は、その特異な人物伝により、早くから『堤中納言物語』「虫めづる姫君」のモデルとなった可能性が論じられている。宗輔は堀河朝を中心に栄えた音楽文化の中でも重要な位置を占める一人であり、『梁塵秘抄とその周縁』(植木朝子2001)では、今様や朗詠を通し、音楽面からもこのモデル論について検討がなされている。しかし、肝心の宗輔その人について扱った論考は非常に少なく、若御前に至っては発表者の管見に及ぶ専論はない。

若御前は、楽書『愚聞記』、『糸竹口伝』により、鳥羽朝に男装で笛の演奏を行なっていたことが伝えられる。これとよく似た説話として、『平家物語』「祇王」の章段の白拍子起源譚があり、鳥羽朝という時期や、男装・舞といった男性性、若前(和歌とも)という名前など、軽視し難い共通点を持つている。この「若前」と「若御前」が同一人物である可能性は、すでに、『国史大辞典』(五味文彦 一九九三)、『延慶本平家物語全注釈』(延慶本注釈の会 二〇〇五)などの当該記事により指摘されるところであるが、踏み込んだ考察はなされていない。その主な要因としては、上述のように若御前がどのような人物であるのか未詳なことや、両者の共通性を積極的に論じられるだけの芸能的実態が明らかにされていないことなどが考えられる。

本発表では、白拍子創始者の一人であると伝えられる若前が、若御前とどのような関係にあるのかを考察する。まず、『中右記』において若御前と推定される宗輔女の記事を整理し、系図や楽書の記述と照合することで、若御前という人物の経歴を可能な限り明らかにする。次に、音楽活動の実態に関する検討を行なう。平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて成立した楽書『胡琴教録』、『残夜抄』の記事や、若御前の演奏伝承を汲むと考えられる箏譜『類箏治要』などを用いて、実証的に若御前と白拍子の関連性を検証する。

### 「佛光寺門徒にみる古今伝授——その性格と系譜——」 吉田 唯氏(近畿大学・非常勤講師)

佛光寺(京都市下京区)とは、浄土真宗佛光寺派の本山である。その佛光寺に、現・大阪府平野区で「平野葉(調胎湯)」を販売していた奥野家に関する資料が残されている。佛光寺で起こった、経豪(一四五一〜一四九二)が佛光寺から本願寺に門徒を引き連れて帰参した事件の際に、門徒の引き留めにあたったのが奥野家七代目当主西舜であり、「平野葉」はその褒美として佛光寺第十四世経誉(一四五五〜一五二二)より「厨子」とともに賜ったものである。享保二十年(一七三五)版『摂陽群談』巻第十六「名物土産の部」にも平野の名産として記されている。

一方で、「古今伝授」関係の資料も多数残されている。奥野家は、堺伝授(地下伝授)とよばれる宗祇(一四二一〜一五〇二)が堺の牡丹花肖柏(一四四三〜一五二七)に伝授した系譜に位置し、資料の中には「神道王道歌道之肝心」と書かれた『古今和歌集訓読説校合口訣』や『八雲神詠伝』等も残されている。三輪胤胤氏が『歌学秘伝の研究』(風間書房、一九九四)において、『八雲神詠

『伝』には吉田神道の教理が説かれていることを述べているように、奥野家の『八雲神詠伝』にも「吉田兼俱」の名が記されている。さらには、吉川惟足（一六一六～一六九五）が「天神地祇」と書いた軸も残されているのである。浄土真宗は親鸞（一一七三～一二六三）以降「神祇不拜」を推奨していたが、佛光寺は第七世了源（一二九五～一三三六）が、存覚（一二九〇～一三三三）に『諸神本懐集』を執筆依頼するなど、神祇に許容的な態度も見せていた。そのために、門徒が和歌を通して神祇を許容できたと考えるが、近世期の吉田家や和歌の影響力の大きさも無視できない問題である。

そこで、奥野家に残されている「平野葉」をめぐる縁起より奥野家の性格を、『古今和歌集』の伝授内容をもとに、近世期の佛光寺派の門徒と神祇との関わりについて見ていきたい。

#### 「南方熊楠の妖怪研究と近世説話資料」 伊藤慎吾氏（国際日本文化研究センター・客員准教授）

明治後期から昭和初期にかけて民俗学や粘菌研究を主とする植物学などさまざまな分野に足跡を残した南方熊楠（一八六七～一八四一）の関心は多岐に及ぶ。日本文学そのものに対する関心は低かったものの、昭和期に入ると物語文学の分析も次第に行うようになる。しかしながら、資料としてであれば、これら文学作品を扱うことは早くから行っており、中でも説話文学は妖怪の事例収集に欠かせないジャンルであった。

熊楠の妖怪に対する関心が具体的ななたちを持つてくるのは柳田國男との交流が始まってからである。これを機に和歌山県下の妖怪伝承の収集を活発化し、併せて文献資料からの事例の抽出を積極的に行うようになる。中でも近世期の説話集は主たる資料として重要視していたように思われる。その最たるものが『甲子夜話』であろう。これを読むことができたのもまた柳田國男の助力が大きい。このほか、英国から帰朝して以来、数多くの文献に目を通す日々を過ごした。群書類従（正・続・続々・新）、史籍集覧、近世文芸叢書、徳川文芸類聚、随筆文学選集をはじめ、国書刊行会の刊行物など、あたら限りの文献を読んでいたことが記録から確認できる。

注目すべきは、単に通読するだけでなく、同時に抜書を作成していたことである。これは『田辺拔書』と題され、明治四〇年作成の第一巻から始まり、全六一巻に及ぶ。この大部の抜書集は現存し、近年、調査分析が進められ、徐々にその重要性が知られるようになってきた。熊楠の日々の学究活動の実態と変遷を捉える上で欠かせない資料なのである。

本発表では、妖怪研究において近世期の説話資料がどのように入手され、読まれ、論考に利用されていったのかということを中心にすることを課題とし、その際、『田辺拔書』を中心的な分析対象として扱うこととする。これにより、井上円了や柳田國男とは異なる妖怪研究の特徴が見えてくるのではないかと思われる。

#### 「和泉国一宮大鳥大社の縁起の位相」 向村九音氏（桃山学院大学 学習支援センター・講師）

大阪府堺市に鎮座する和泉国一宮大鳥大社は、日本武尊の死後、白鳥と化した霊を祀ったと伝えられる古社で、古来多くの縁起を有する。同社には現在、「大鳥大神宮五社流記帳」【1】、「和泉国大鳥大明神縁起帳」【2】、「大鳥五社大明神并別当神鳳寺縁起帳写」【3】、「和泉国五社大明神并惣社八幡宮縁起帳」【4】、「大鳥五社大明神并別当神鳳寺由緒覚書」【5】の五本の縁起が伝来するといい、さらに、光明院所蔵の「大鳥明神并神鳳寺縁起」【6】、内閣文庫所蔵の「和泉州大鳥五社大明神并府中惣社八幡宮縁起帳」【7】の存在も知られる。本発表では一つ一つの縁起の位相を捉えた上で、各縁起の関連について考える。

大鳥大社の現在の祭神は、先に述べたように日本武尊であるが、天照大神や大鳥連祖神の祭祀を語る縁起もある。【1】は大鳥明神を祀るとし、同題の内閣文庫所蔵本では天照大神を祀ると記され

る。この書については、すでに堀内和明氏が大鳥大社所蔵本にはいくつかの改竄箇所があり、それらがすべて神宮寺神鳳寺に関わるものであると指摘されている(『高石市史』一)。同書の改変には神鳳寺僧が関わっていると考えられるだろう。それに対して【2】〜【5】は日本武尊を祀るとした上で、大鳥美波比社の祭神を天照大神とする。一方【6】や【7】は大鳥大社主神を天照大神としている。【6】は元禄元年頃に【3】などをもとに述作されたと考えられ、本書の成立にも神鳳寺僧が関与していたことが窺える。元禄年間には神鳳寺中興の快田が柳沢吉保と親密になり、幕府に依頼して堂宇を修復した時期に当たる。こうした時に古来の縁起がいかにかに踏襲ないし改変されたのか、追究していく。また、【7】も元来、大鳥大社あるいは神鳳寺に伝来したとみられ、神鳳寺僧関与の可能性を持つ。本書についても【4】との関係を押さえつつ、位置づけを行う。各縁起の位相を捉えた上で、関連のみられるものにおいては、比較を通して縁起の変遷を追う。また、その変遷に神鳳寺僧や周辺諸社寺がいかに関わっていたのか考察する。

「新出資料による安楽庵策伝の出自と交流の再検討」 湯谷祐三氏(愛知県立大学・非常勤講師)  
笑話集『醒睡笑』の編者にして、「落語の祖」とも言われる安楽庵策伝(一五五四〜一六四二)の出自については、金森氏の出身とする関山和夫氏(『安楽庵策伝』等)と、それに懐疑的な鈴木棠三氏(『安楽庵策伝ノート』等)との間で長らく論争があった。策伝自身の語るところでは、『百椿集』の冒頭に、文禄三年(一五九四)、策伝四一歳の時に堺の正法寺の住職になったことを記すのが最も古い伝記事項で、それ以前の活動について自身何も記しておらず、詳細は不明であった。筆者は策伝がその住持を務めた京都新京極の誓願寺(現浄土宗西山深草派総本山)に所蔵される「苦屋壺記」と題された資料を拝見するに及び、これらの問題に対する新たな見解を持つに至った。この資料は現在掛幅一軸に表装された漢文体の文章で、末尾には文禄三年に南禅寺の玄圃靈三が記した旨の奥書があり、紙の調子や筆致・印章などから見て同人の真筆と考えられる。

策伝の伝記研究から見て、この資料は次の二点が注目される。一つは、策伝の出自が金森氏であるなどとは全く言及がないこと。もう一つは、策伝による中国地方の寺院建立の背後に宇喜多秀家の帰依があったということである。「苦屋記」が起草された文禄三年は、文禄・慶長の役の間であり、秀吉晩年の権勢が絶頂期にあった時期である。もし策伝が本当に金森長近の弟であったならば、ここにその事を述べないのは全く不自然で、策伝の出自は金森氏とは関係がないと考えざるを得ない。また、秀吉の「五大老」の一人宇喜多秀家が策伝の檀越であったというのも新しい知見である。その他、現在の『醒睡笑』注釈における問題点も指摘する。

### 「八幡神本地大日如來說について——『八幡愚童訓』『本地事』を中心に——」

村田真一氏(佛敎大学・非常勤講師)

『八幡愚童訓』(以下『愚童訓』)には、八幡神について、蒙古襲来を中心に国家守護の靈威を説くものと、衆生救済の様々な利益を説くものの二種があり、研究上ではそれぞれ甲本・乙本と呼び分けられている。本発表では、『愚童訓』乙本「本地事」に見られる八幡神の本地について、その到達として大日如來說があらわれていることを取り上げ、様相や意義を考察する。

中世当時、八幡神の本地説は、釈迦・阿弥陀の両説が流布しており、そうした中で、『愚童訓』の本地説の特徴は、浄土敎の隆盛を受けた石清水宮の本地説として阿弥陀を強調しつつ、同時に、二仏同体として釈迦・阿弥陀の両説の統合を図るものであったとされてきた。

しかし、『愚童訓』「本地事」には、「理智を一体に安置する吾神の御体」や「理智不二、本地法身あはれたり」、さらには「大菩薩を大日如来と申也」といった、八幡神の本地が大日如来であることを示す一連の記述が末尾に置かれている。『愚童訓』の本地説は、釈迦・阿弥陀の関係を単に統合し

たものではなく、「此本地よりして機にしたがひ願にまかせて、釈迦・弥陀とあらはれ給者なれば、二仏の差別を論ぜず」とあるように、むしろ、最終的には本地大日如来説によつてこそ二仏団体であることが説き明かされる、という構成になっている。

本発表では、これまでの研究では注目されてこなかった『愚童訓』『本地事』における八幡神本地大日如来説について、記述を具体的に読み解くことでその様相を明らかにし、中世の八幡信仰および神仏信仰としての意義を論じる。とくに、ほぼ同時代に成立した『八幡宇佐宮御託宣集』と『愚童訓』の比較は、先行研究でも度々なされてきたが、本地説という観点からの立論はなされておらず、課題として残されている。すなわち、神の根源への希求の結実としての本地説に着目することで、中世八幡信仰の宗教世界の核心に接近し、その一端を明らかにしたい。

### 『心性罪福因縁集』法志「説法論議比丘」説話考——真福寺蔵新出院政期写本の紹介を兼ねて——

吉原浩人氏（早稲田大学文学学術院・教授）

『心性罪福因縁集』三巻には「大宋国智覚禪師注置」と記され、『宗鏡録』百巻・『万善同帰集』三巻などの著者である永明延寿（九〇四〜九七五）の著作と伝えられる。日本では、寛治八年（一〇九四）の永超『東域伝燈目録』に、著者が「永明智覚禪師」と明記されている。その後、永観（一一〇三〜一一一一）の『往生拾因』に引用され、『今昔物語集』巻四第九・十話は本書を原拠としている。すなわち院政期には、延寿の著作として理解され、流布し受容されていたのである。ところが中国のどの経録類にも、『心性罪福因縁集』の書名は見えず、弟子が編纂した著作目録にも含まれていない。そのため本書は、延寿の真撰なのか、日本における偽撰なのか、研究者によって判断が分かれている。禅思想に基づいた典籍であるが、日本撰述であるならば仏教説話集として高く評価されなければならない。

本書は、元禄十三年（一七〇〇）に印行され、これを底本とした『正統蔵経』本が唯一の活字本である。ところが、名古屋市真福寺宝生院大須文庫悉皆調査の過程で、本書の院政期写本の断簡が新たに発見された。その第一報は、阿部泰郎編『中世寺院の知的体系の研究——真福寺および勸修寺聖教の復元的研究——』（科研費研究成果報告書、二〇〇七）に報告されている。さらに調査の進捗にともない、断簡二十七丁分が確認されている。これは、版本巻中・巻下の一部に相当し、欠落や誤写を校正できる貴重な発見である。私はかつて、本書について二本の論文を執筆し、日本における流伝と思想的意義について論じたことがある。ところがその後の二十年間に、本書に関する論考はごくわずかしかなく、研究が著しく停滞している。

本発表では、まず新出の院政期写本断簡の残存状況について紹介する。ただ写本と元禄版本影印は、本年十二月に刊行予定の『中世禅籍叢刊』第十二巻「稀観禅籍集 続」（臨川書店）に収載され、吉原が解説・翻刻を担当することになっているため、ここではごく簡単な解説にとどめたい。

院政期写本には、現行版本二十五話のうち、中・一一・下・二・下・四に相当する本文が現存するが、全文残っているのは下・四のみである。現存形態から、これら三話は共に下巻にあったと考えられ、写本と版本では話順が異なっていたことが明らかである。ここでは、『心性罪福因縁集』全体像の解明のため、まず完存する下・四について、両者の本文を詳細に比較した上で、内容を詳しく検討していきたい。本話は、院政期写本では「説法論議比丘」と題され、本書の中でも二番目に長い。説法や論議は生死度脱のためには役に立たず、心性を観察思惟することのみが煩惱を断ずることが究竟の法であることを主張する。この説話自体の分析と、使用されている仏語を一字一句分析することによって、本書の成立背景や本覚思想との関係を、ある程度見通すことができよう。また本話は、「法志和尚」の行業を記したものである。これが、版本上・八・中・九などに見える梁代の「宝誌和尚」と、どのようにかわるのか、あるいはかわらないのかについても検討していきたい。